青春☆文化系 FILE：22

☆★☆★ 若狭高弁論部 ★☆★☆

論理的思考、表現磨く

世の中のあるべき姿や身の回りの疑問をテーマに、自分の思いを聴衆にぶつける「弁論」。発表時間にちなみ「７分間の言葉の芸術」とも言われる。

「声に抑揚をつけて重要な部分を印象づけたら」「身ぶり手ぶりを交えて訴えるように」―。若狭高にある県内唯一の弁論部。放課後の教室に、部員２人の声が響いた。2003年に福井で開かれた全国高校総合文化祭（全国高文祭）を機に、前身のディベート同好会を発展させる形で発足した同部は毎年、県大会や全国大会で優秀な成績を収めている。

「将来の夢は声優」という部長の中川未来（みく）さん（２年）は「表現力を磨きたい」と入部した。普段から新聞やテレビで社会問題をチェックし、テーマを決めると関連書籍やインターネットで調べる。原稿は顧問の渡邉久暢教諭（49）の添削を受けて何度も書き直し暗記する。一つ仕上げるのに１～２カ月かかるという。

２月に開かれた全国高文祭県予選では、北朝鮮のミサイル発射実験や日本の迎撃態勢の強化、トランプ米大統領の政治姿勢に触れながら「戦争を食い止めるために、国家間の小さな摩擦を解消していかなければいけない」と訴えた。

部活動を通して、社会のさまざまな問題に関心が高まったという中川さん。「以前はテレビ番組や新聞を見て、何となく受け流していたけれど『それは違うんじゃないか。私はこう思う』と考えられるようになった」

若狭高 原稿の内容を吟味する渡邉さん（左）と中川さん＝3月、小浜市の

身ぶり手ぶりを交えながら、発表の練習をする渡邉さん

■ ■ ■

弁論は、構成の分かりやすさや結論の説得力などの「論旨」60点、声量や間の取り方などの「表現」40点で審査される。渡邉教諭は「スピーチに目が行きがちだが、原稿の論理性を究め、内容を充実させることが大切」と話す。

２月の県予選で２年連続最優秀賞に輝いた渡邉結衣さん（２年）。「異質な他者と理解し合うために」と題して、昨年８月の中国短期留学の経験を基に主張を展開した。単なる自身の体験談に終始しないよう、社会学者の青木保さんや劇作家の平田オリザさんの著書を引用し「『みんな違ってみんないい』で終わらせず、異なる文化的背景を持つ者同士が『なぜそう考えるの？』と問うことを通して、歩み寄るための対話を行うことが重要」と強調した。

昨年臨んだ全国高文祭では、上位入賞者の豊かな表情や声の強弱といったパフォーマンス力に驚かされたという。８月に長野県で開かれる全国高文祭に向けて「聴衆一人一人の目を見て、しっかりと思いを伝えたい」と意気込む。

渡邉教諭は「物事を複眼的、クリティカル（批判的）に見られるようになってきた」と２人の成長に目を細め「社会で求められるプレゼン力や論理的思考力を養ってほしい」と期待を込める。

中学時代からの同級生で、切磋琢磨（せっさたくま）してきた２人。渡邉さんは「考え方が偏らないよう、いろんな人の意見を聞いて弁論内容を充実させたい」と後輩の入部を心待ちにしている。 （宇野和宏）

福井新聞 © 福井新聞社 無断複製・転載を禁じます